



京大広報

No. 590

2004. 5

目次

〈大学の動き〉

- 部局長の再任……………1704
京都大学名誉博士称号贈呈式……………1704
新入生向けガイダンスの実施……………1705

〈部局の動き〉

- 京都大学／ユネスコ／国際斜面災害研究機構・
UNITWIN 共同計画本部設立記念式典……………1706
生存圏研究所看板掲式……………1707
法科大学院開設記念行事を開催……………1707

〈寸言〉

- 広島京大会の活動 徳永幸雄……………1708

〈随想〉

- 大気中二酸化炭素濃度の大幅増に思う
名誉教授 松井正和……………1709

〈洛書〉

- 溪流生態学入門 山下 洋……………1710

〈資料〉

- 平成16年度入学試験諸統計……………1711
平成15年度教育実習実施状況について……………1716

〈訃報〉……………1717

〈日誌〉……………1718

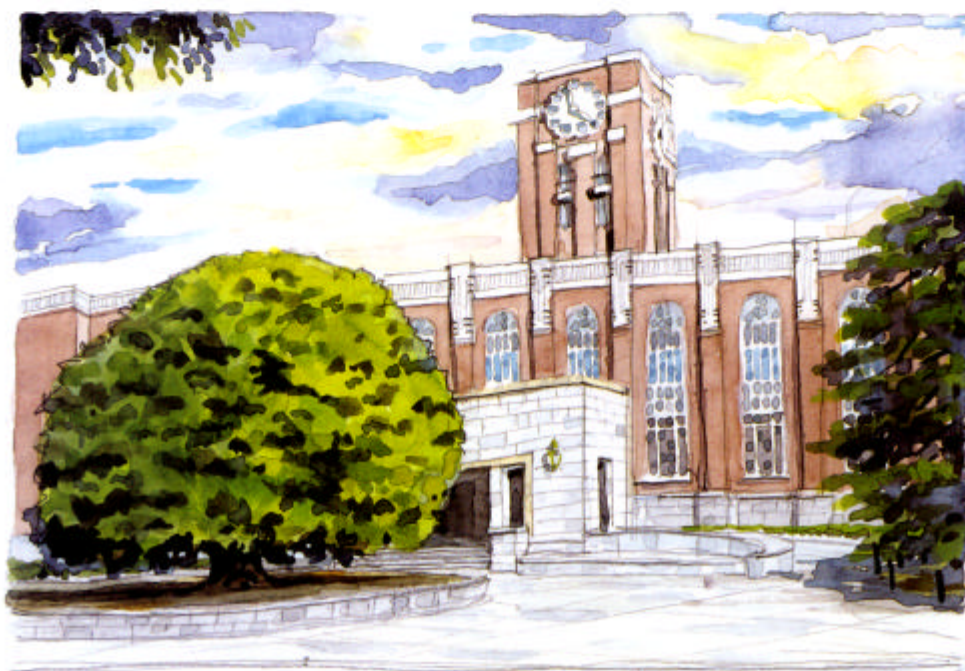
〈お知らせ〉

- 平成16年度創立記念行事音楽会の開催……………1719

〈公開講座〉

- 平成16年度（第68回）農林経済・経営・簿記
講習会……………1720

〈編集後記〉……………1720



山田 圭さん
「懐かしの時計台」

Kyoto '04 23/Feb.

京都大学広報委員会
<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

洛書

溪流生態学入門

山下 洋



九州で生まれ育った私は、サケ科の魚とは全く縁がなかった。淡水魚といえばほとんどがコイ科であり、子供の頃はフナ、コイ釣りに熱中した。それが高じて魚類研究の分野に進んでしまったのかもしれない。東北地方に職を得て長年暮らすうちに魅入られてしまったのが溪流釣りである。沿岸魚類の生態調査のため頻繁に三陸に出かけたが、調査の間を見つけては、河川調査と称して溪流に入った。初夏の三陸は朝が早く、午前4時にはすでに日が昇っている。朝霧の中藪をこいで河原に出ると、シカによく出会った。カワセミやヤマセミを見かけると、魚が釣れなくても幸せな気分になれる。溪流釣りは半分山登りであるという側面も見逃せない。私はルアー専門なので、数回ポイントをせめて当たりがなければ上流へ移動する。足を滑らして岩から転落したり川に落ちたり、少々危険な雰囲気も楽しい。釣れた魚のうち私の手の甲より小さい個体(<18cm)は放流し、それ以上は持って帰ることにしている。持ち帰る魚はその場で内臓を取り除くが、その際には必ず胃内容物をチェックする。胃内容物のほとんどは水生や陸生の昆虫、さらに腐食した木の葉やゴミであり、捕食された魚類を見ることは全くなかった。それなのになぜ小魚型のルアーを追うのか、明確な理由はわかっていないようだ。ルアー釣りについてずっと気がかりだった問題が最近解決した。ルアー釣りでは、しばしばルアーが川底や木に掛かって放棄せざるを得ないことがある。1個2,000円もするルアーをなくすと財布への影響も大きい。放棄された針付きのルアーが野生生物に対して引き起こす弊害の可能性は、私自身にとって極めて重大な問題であった。これについては、友人がルアー回収装置を考案した。伸縮する釣り竿の先端に布を巻き付けただけの単純な構造だが、これによりほぼすべてのルアーを回収することができるようになった。溪

流釣りのもう一つの喜びは、サケ科魚類の美しさである。魚類の中で一番美しいと思う。今や、コイ科の魚を相手にする気にはとてもなれない。アマゴやオショロコマも美しいが、私は東北で釣れる清楚なヤマメが最も好きだ。サケ科魚類は系統的には古い分類群に属するらしいが、生態的な可塑性に富み環境が変わると柔軟に適應して生活史さえ変えてしまう。陸封型と降海型はその典型である。2年前に京都大学に転動して以来最も寂しいのは、溪流に行く時間が皆無に近いことである。大きな楽しみを失ってしまった気がしている。

私が所属するフィールド科学教育研究センターは、農学研究科附属演習林、亜熱帯植物実験所、水産実験所、理学研究科附属瀬戸臨海実験所を統合して平成15年度に発足した。森の施設、里の施設、海の施設がひとつの組織となったフィールドセンターは、森林域、里域、沿岸海洋域の生態的な連環機構の解明を目指して“森里海連環学”という新しい学問領域の創生に取り組んでいる。多くの物質は陸域で作られ海に下ることから、物質は基本的には陸から海へ移動する。一方、サケ科魚類は川で生まれ稚魚期に海に降って成長し、海の栄養をたくさん蓄積して森へ戻ってくる、数少ない逆向きの物質輸送機構である。最近の研究では、サケ類が遡上する川では河川に近いほど木の成長がよく、安定同位体を用いて木の成分を分析すると、海を起源とする栄養素が成長に多大な貢献をしていることがわかりつつある。これまでは遊びだったが、もしかしたら私の残りの研究人生の中で、森林の構造まで含めた溪流生態学の調査をすることが可能になるかもしれない。不純と言われるかもしれないが、研究の遂行にモチベーションは重要である。この話のオチは、読者に溪流生態学を説くのではなく、私がこれから入門したいということにある。

(やました よう フィールド科学教育研究センター教授)